『ココロ』を求める機械兵士（ルーンフォーク）

仙崎　龍牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
『ココロ』を求める機械兵士（ルーンフォーク）

【Ｎコード】
Ｎ０５３０Ｘ

【作者名】
仙崎　龍牙

【あらすじ】
ここではない場所　ラクシア

大昔の神同士の戦いで人族と恐ろしい姿の蛮族に別れた世界

人族の中の身体の一部が機械でできている種族　ルーンフォーク。

神の声も聞こえず　妖精も見ることのできない　戦いのために生み出された種族

今は普通に暮らしているがやはり神の声は聞こえない。

神の教えを広め、いつか声を聞くために戦う

そんな物語。

この小説はソードワールド２．０を元にしていますが演出の都合等でルールや公式設定を破っている部分が多数あります。　ご注意ください。

捨てられた機械兵士（ルーンフォーク）

気が付いたら砂漠に横たわっていた。今回も砂漠をうろつく蛮族を殲滅するだけの簡単な仕事だと思っていた。戦闘中、ゴブリンを殴り飛ばそうとしたら後ろから『何か』が僕の体を貫いた。

僕と一緒にゴブリンを弾丸が貫き、すでにボロボロになっていたゴブリンが倒れる。　僕も戦闘でかなりのダメージを負っていたし、当たり所が悪かったようで地面に倒れる。

『殲滅任務完了。　撤収開始。』

僕と同じジェネレーターで生まれた兄弟（同型機）の声と共に足跡は僕から遠ざかっていた。　僕は修復不能と判断されたようで置き去りにされたようだ。　考えることはできるから多分頭部は大丈夫なんだろうと思う。　思ったところで無駄だよなと自分を笑いながらかろうじて動く首を回し空を眺める。

―――　こんなに太陽ってキレイだったんだな。

生まれてからずっと命令通りに動いてきた。　僕は空を飛ぶ蛮族と戦った事なのない。　多分始めて空を眺めた。　そして太陽も。

『汝の心に　常に太陽輝かんことを』

僕の耳に言葉が飛び込んできた。　感じる範囲に人は愚か生物は一体もいない。

幻聴まで聞こえるようになっちゃった。　僕もうダメかもな。

そんなことを考えているうちに意識はなくなった。

拾われた機械兵士（ルーンフォーク）（前書き）

拾われた機械兵士（ルーンフォーク）

まぶたに光があたり目を覚ます。　さっきまで晴れていた空は真っ白に染まっていた。空気はほこりっぽさが全くなく、寝ているところが柔らかい。　僕は少し悲しくなってつぶやいた。

「空に太陽がない・・・」

仲間に置いて行かれたことは悲しくない。僕も今まで何度も修復不能だと判断した兄弟（兄弟）を何回も置き去りにしてきた。　今回はたまたま僕の番だったただそれだけの話しだ。

「司祭様！患者が目を覚ましました！」

奥の方からパタパタという足音が僕の方に近づいてくる。足音が止まると同時に僕の視界が金色に染まる。

「大丈夫ですか？　どこか痛いところありませんか？」

金色の物がチラチラと動く。

「エミー。　落ち着きなさい。　患者が驚いているでしょう」

奥の方から優しい男の声が聞こえた。コツコツと言う足音がさっきの足音とちがいゆっくりと近づいてくる。

「もう起きても大丈夫なはずですよ。　ゆっくりでいいから起き上がって見て下さい」

僕は身体に力を入れて起き上がってみる。身体は思ったより簡単に動かすことができた。自分の体を改めて見てみる。　先頭の時に付けていた鎧　『ハードレザー』は戦闘でボロボロになったせいか今では新しい見たことのない白い服になっている。　腕は戦闘で付いた傷や泥が全く付いていなかった。　まるで最初から戦闘が嘘だったかのように。　一通り身体を見まわした後、声のした方を見る。そこには見たことのない白い服を着た心配そうな顔をした金髪のエルフの少女と似たような服を着た優しそうな人間の男がいた。

男は僕が起き上がったことを確認すると口を開いた。

「私はここのティダン神殿で司祭をさせてもらっている　アドルフ・マルティンです。隣のエルフの少女は、エミー・ミストラル。　君の名前はなんですか？」

僕はすこし考えたあと応える

「僕に名前はない。　強いて言うなら周りの人は僕の事をE一（イーのジュウ）10と呼んでいた」

アドルフは少し考え込む。

「名前がないのですか・・・　それは後にするとして君はなぜあんなところで倒れていたのですか？」

僕は2人に簡単に事情を話した。　話が後半に近づくにつれてエミーの顔が涙や鼻水で大変なことになって行く。

「司祭ざま～　この人、神殿で面倒見ましょうよぉ～」

エミーが捨てられた子犬のような目でアドルフに頼む。

「捨て猫や犬じゃないんですから・・・　しかしあなたに帰る場所がないのならば僕たちは歓迎しますよ」

と言って手を差し出す。

戻ろうとしても任務の度に拠点の位置は替わる。　倒れてからどのぐらい経ったかわからないがもう移動しているだろう。　もし場所が分かったとしても近づいただけでハチの巣にされるのが落ちだ。

僕はアドルフが差し出した手をしっかりと握った。　この子木から僕の新しい生活が始まった。　部屋の中だったので気が付かなかったが外では太陽がいつもよりも輝いていた。

生まれ変わった機械神官見習い（ルーンフォーク）

僕が拾われて神殿でお世話になるようになってからちょうど1年後。
アドルフ司祭やエミーがいろいろなことを教えてくれた。　ルーンフォークは戦うために産まれてくるわけではない事。　兵士の変わりに蛮族を退治している『冒険者』の存在やその他の常識。　そして僕の住んでいる神殿で祀っている『太陽神ティダン様』　の教えを。
僕は教えを聞いた時、気絶する前に聞いた声を思いだした。　そんなこんなで特に行く場所もないので神官見習いとして神殿の手伝い（掃除買い物など）をしながらしばらく戦いを忘れてのんびり暮らしていた。　神殿内では手伝いという扱いだが外では僕はアドルフ司祭の養子という扱いになっている。　その時に名前をもらった。
ソウキスという名前を。

「平和だなぁ・・・」

僕は神殿の前の落ち葉をほうきで集めながらつぶやいた。　神殿の中ではアドルフ司祭が信者に向けて説法をしている　とは言ったものの、ここは『橋の国　ダーレスブルグ公国』と言う人口が４万人ほどの都市から南の方向で馬で2～3日の距離にある小さな村　レセップスという農村　村全体がティダン信者だと言っても人口は１００人に満たない。　今日も１０人ほどが神殿の中に居る。
時々家畜として飼っている鶏や牛、他にも子供たちの声が聞こえる程度の村にいつもとは違う悲鳴が上がり、門の方から血まみれの男がこっちに向かってよろよろと今にも倒れそうな状態で走ってきた。
僕が倒れないように背中を支えてやると男、リチャードさんが息切

れを起こしながら声を絞り出した。

「蛮族が・・・　蛮族が襲撃してきやがった・・・　ライルとミシェルはやられた・・・途中で冒険者が・・・」

リチャードさんはここまで言うと意識を失う。　呼吸はある。まだ生きてる。　僕はリチャードさんを抱えると神殿へ走り、扉を蹴破り叫ぶ。

「アドルフ司祭！　急患です！　蛮族に襲われて重傷です！」

「ソウキス！　今すぐ奥の診察室へ！　エミーは私の部屋にある黒い箱を持ってきて下さい！」

僕は指示に従い、ベットへ寝かせる。　アドルフ司祭は首にかけている聖なる印を軽く握ると治癒魔法の呪文を唱えた。

「我らが太陽神ティダンよ　彼に癒しの光を　キュア・ハート」

アドルフ司祭の聖印が一瞬輝くとリチャードさんの身体が一瞬輝く。　光が消えたとき身体の傷は消え去っていた。

治療が終わると同時にエミーが扉を開ける。　手に靴が入りそうなくらいの黒い箱をもって駆け込んできた。

黒い箱を確認するとアドルフ司祭は今まで見せたことのない暗い顔をしながらこう言った。

「あなたたちに　頼みたい事があります。」

生まれ変わった機械神官見習い（ルーンフォーク）（後書き）

少し説明が多い回になってしまいました。　すこしでも楽しめる作品にしていきたいので応援よろしくお願いします。

懺悔する神官（アドルフ）

僕とエミーはアドルフ司祭の前に並んで立つ。　いままで何か頼む時と何か雰囲気が違う。　そんな気がして自然と僕たちは並んでいた。

「その前に１つ謝っておきたいことがあります」

重い雰囲気を声が壊す。

「私は戦うことができません」

アドルフ司祭はそう言うと普段はローブに包まれて見えない右肩をさらした。　右肩を見て言葉を失った。　敵である蛮族が信仰している神　腐敗の女神ブラグザバスの刺青が彫られていたからだ。

「私は若い頃冒険者をやっていました。　しかし、その冒険の途中に蛮族の一団に捕まってしまい、ブラグザバス信者によって呪いをかけられてしまいました。　その影響で攻撃魔法が全く使えなくなってしまいました。」

言い終わると同時に再び空気が重くなる。

「司祭様は　そんな刺青していてもティダン信者・・・ですよね？」

エミーが震えた声で問いかける。　すると真剣な顔をしていたアドルフ司祭が少しだけ微笑んだ気がした。

「はい。　私はティダン様を信じております。　ティダン様　暗闇

に閉ざされた大地を明るく照らしたまえ　『サンライト』」

アドルフ司祭は優しく呪文を唱える。　指先から光があふれだす。
　特殊神聖魔法はその神を信仰していないと使えない。　これはティダン様の特殊神聖魔法だ

「この魔法が証拠です。　疑うのなら『ディティクト・フェイス』をかけてもらっても結構です」

再び真剣な顔に戻る『ディティクト・フェイス』はある程度の神官ならばだれでも使える神聖魔法の一つで　かけられた相手が信仰する神と実力を知ることができる魔法だ

僕はルーンフォークだからいくら強く願おうとも使えない魔法だ。
　僕はエミーの方を一瞬見る。　直後叫び声が部屋中に響き渡った。

「私は司祭様の事を信じます！　私は毎日司祭様の説法を聞いてきました！　あんなにうれしそうな顔で話す司祭様がティダン信者でないわけがありません！」

両目に涙を浮かべたエミーが叫ぶ。　僕は驚いて少しだけ後ろに下がってしまう。

「エミー　信じてくれてありがとう　これでやっと本題に移れます。
　時間があまりないので単刀直入に言います」

そこまで言うとアドルフは悔しそうな顔をしながら深呼吸をする。
　再び息を吸って言葉を絞り出した。

「私の変わりに、戦ってもらえませんか？」

懺悔する神官（アドルフ）（後書き）

昨日は更新できなくてすみませんでした。　今回戦闘シーンに入りそうだったのにまたまた戦闘シーンにはいらず・・・　もっとテンポよく話を描きたいと思う　今日この頃

覚悟を決める神官少女（エミー）

僕たちは再び固まる事になる。　去年まで戦っていた僕はともかく、とてもじゃないが戦えそうのないエミーまで戦えと言うのだから。

「反対です！　エミーは戦えません！」

僕はアドルフ司祭に食って掛かる。　アドルフ司祭の判断はどんなヘンなものでも間違っていたことはない。　だけど今回ばかりは賛成するわけにはいかない。

「ソウキス　私は大丈夫だから。」

エミーは少し震えながら声を絞り出す。

「弱き者に力を。　ティダン様は弱い者に力を与えてくれる。　もし私が心配ならソウキスが敵を倒しちゃって。　私はどんなにソウキスが傷ついたとしても絶対に元通りにするから！」

エミーは首に掛けてある聖印を強く握りしめ、叫ぶ。　こうなったエミーは梃子でも動かない。

「戦うのは構わないけど僕より前に出ないでね。　僕は神聖魔法使えないんだから」

僕はしぶしぶついて行く事を許可する。

「覚悟はできましたね？　私からの贈り物です。」

アドルフ司祭は言い終わると箱を開ける。　中には行っていたのはセクタスと言うグローブとスパイクシューズ、そしてこぶしくらいの大きさの水晶のような石が３つ。

「これを使って私の変わりに戦って下さい。」

アドルフ司祭が頭を下げようとしたとき、僕はひったくるように箱を奪い取る。

「僕はもともと戦うのが仕事ですから気にしないでください」

僕は両手にセクタスを　今履いている靴を脱ぎ、スパイクシューズを履く。

石をどうしようか悩んでいたらエミーがその石を拾う。

「私はこの『魔昌石』もらって行きますね。　魔力が切れたら大変ですから。」

エミーは石を拾うと外へ走って行った。　僕もそれに続くように教会から飛び出していった。

覚悟を決める神官少女（エミー）（後書き）

また今回も説明回になってしまいました。　こんなダメダメな俺は穴掘ってうまって（ｒｙ

次こそお待ちかねの戦闘回！　うまく書けるように頑張ります！

戦場に立つ機械神官（ルーンフォーク）

僕はエミーを追いかける。　部屋を飛び出したのはたった一瞬の差だったはずなのに、かなり差が開いている。　急がないとエミーが先に敵と戦うことになる。　近接戦闘の手段を何一つ持っていないから危険だ。　僕は地面をける足にさらに力を入れる。

神殿はほとんどの村の人が利用するために、村の真ん中あたりにある。　エミーと僕は村の正面にある門へ向かって走って行く。　走って行くとだんだんヘンなにおいが強くなっていった。　僕たちはすぐにそのにおいの原因を知る事になる。

門までもうすぐと言うところでエミーが動きを止める。　僕はエミーを追いかけ突っ走る。

門の周辺にはかろうじて『元』人だとわかる肉片が5～6個転がっていた。　元は整備されていた道もただの血の海だ。　その血の海の真ん中で動き回っている人が一人、　蛮族とおもわれるヤツが4体いる。　そのうち3体はいままで戦ったことのあるゴブリン　奥で人が戦っているのを笑いながら見ている奴はわからない。　多分ゴブリンの中でも上位種なのだろう。

僕は比較的近いところにいるゴブリンに殴りかかり、吹っ飛ばす。　今まで1人をいたぶっていたゴブリン達は僕を新たな敵と認識したらしく、　僕に向けて棍棒を構える。

後の上位種が「ぶおおおお！」　と叫ぶ。　それが合図になり、僕に向かって襲いかかる。さっきまで襲われた人は一旦奥の方に下がったのか、　もう僕の見えるところに居なかった。　後ろを振り返

りたいと思ったが、ゴブリン達がそれを許してくれそうもない。

僕は一歩後ろに下がり、襲ってくる敵の攻撃を避ける。　そして、先ほど殴ったのとは別のゴブリンの着地と同時に一撃お見舞いする。

ゴブリンは「ブヒィ！」という鳴き声を上げて吹き飛んで行った。

「ティダン信者を傷つけた罪は重い！　その身体で償ってもらいます！　生きて帰れるなんておもわないでくださいね！」

僕はさらに追撃を仕掛けるためにさっき殴ったゴブリンに殴りかかった。

戦場に立つ機械神官（ルーンフォーク）（後書き）

一日考えたわりには何かすっきりしないデキになってしまいました。
どうしたら納得いくものが作れるのだろうか　考えながら日々精進してこうと思いますので応援よろしくお願いします。

奮闘する機械神官（ルーンフォーク）

だがその攻撃は他の二体によって防がれる。　先ほど吹き飛ばした奴も体制を立て直していた。　三体は気持ち悪い顔でニヤけながら僕を囲む。　後が空いていることは幸運と思うべきか。　だけど引いたら後ろにはエミーや先ほど戦っていた人が要る。　自分が傷つく分には構わないが人が傷つくと自分が許せなくなる。

（昔だったら迷わず逃げてただろうな）

僕は心の中で苦笑し、再び正面のゴブリンをにらむ。　正面のゴブリンが一歩後ずさった瞬間、僕は思いきり飛びかかり、左手で軽く殴り、相手が大勢を崩したところで地面に向かって殴る。　地面に顔面がぶつかると同時にスパイクシューズで踏みつぶした。　何か固いものが砕ける感覚が足から伝わる。

（まずは一体！）

つぶした反動を利用して後ろに下がる。　先ほどまで僕の居たところに棍棒が通過した。

つぶしたゴブリンは少しぴくぴく動いている。　どうやら気絶したようだ。

他の二体を倒そうと構え直すと上位種が杖みたいなものを高く掲げた。　そしてその動きを見て僕は上位種の正体に気が付いた。　気が付くのと相手が行動するのは同時であった。気絶した一体が光に包まれる。　光が収まるとよろよろと立ちあがる。　神官ならだれでも使える基本神聖魔法『アウェイクン』だ　気絶したものを起こ

し、すぐに動けるようにする魔法だ。　悪夢はまだ終わらなかった。
今度は3体とも光に包まれる。　光が収まると傷だらけだった身体から傷が消え、元気に跳ねまわっていた。

杖を持った上位種の正体は妖精を操り、神を信仰している『ゴブリンシャーマン』だ。　ヤツが要るだけでどんどん回復されていく。

僕は悔しくて唇をかむ。　相手の魔力の源（ＭＰ）が切れるまで何回倒しても復活するのだから。

絶望のあまり僕は膝をついた。

奮闘する機械神官（ルーンフォーク）（後書き）

どうやってテンポを早くしようか考えていたら何も浮かばなかったので　いっそのことスローテンポをうりにしちゃえばいいじゃんと割り切って続けることに決めました。　なにかアドバイスや誤字があったら教えて下さい。

希望の妖精使い（フェアリーテイマー）

ゴブリン達は気持ち悪い顔で僕に襲いかかる。　僕はただ飛んでくるそれを眺めているだけだった。

後ろから風が吹いた。

気が付いたら前にさっきまで戦っていた人が立っていた。

「苦戦してるね。　手　貸そっか？」

中性的な顔立ちをした同い年くらいの人が僕に手を差し伸べる。

僕はその手を強くつかんだ。

「さっきエルフの神官の子に助けてもらったんだ。　回復に手間取ってごめんね。　遅れた分　きっちり返すよ！　おいで妖精（フェアリー）達　そろそろ出番だよ」

助けてくれた人が細い剣を構えながらつぶやく。　妖精とつぶやいたので恐らく妖精魔法を使うのだろう。　しかし僕はルーンフォークと言う種族の関係で妖精を見ることが出来ない。

ゴブリン達が立ちあがった　『第二ラウンドの始まりだ』　とでも言いたげな雰囲気で「ぶおおお！」　と吠えた。

僕が構えると同時に身体が一瞬輝き温かい力を感じた。　後ろから声が聞こえた。

「遅れてごめん！　今度こそちゃんと癒すよ！」

エミーの声が聞こえた。　その声がゴング代わりになり、僕はゴブリンに突っ込んだ。

「炎の妖精たち！　あそこの豚燃やして！　『ファイアボルト！』」

助けてくれた人が叫ぶと同時にゴブリンが燃え、苦しみだす。　僕は回復の隙を与えないように殴り飛ばす。　再びゴブリンが声を上げながら吹き飛ぶ。　まだ息があるようだ。

ゴブリンシャーマンの杖が再び輝き、先ほど焼かれたゴブリンが光に包まれたが今度は身体にやけどのような傷が残った。　完全には回復しなかったようだ。

傷ついたゴブリンも動きに支障はないようで再び3体同時に殴りかかる。　僕は慌てずに一体ずつ確実によける。

「あんなに動き回ってると魔法で巻きこんじゃうよ！」

助けてくれた人はイラついたように声を上げ細い剣を振りかぶり切りかかる。　その攻撃が傷ついたゴブリンの首を後ろから切り裂く。

しかし傷が浅いのかまだ動いている。

「回復なんてさせません！」

気が付いたら声を上げて殴っていた。　ゴブリンの顔は元より気持ち悪く歪み、吹き飛び地面にたたきつけられる。　その身体はもう動くことはなかった。

近くで動き回っていた2体は仲間が死んだ事に気が付いたのか僕たちに背を向けて逃げ出した。　ゴブリンシャーマンが制止させようとしていたようだが無視して走り去った。　ゴブリンシャーマンも杖を投げ捨て逃げ出して行った。

「追わなくていいの？」

後ろからエミーが歩いて来て僕に問いかける。

「僕たちは守るために戦ったんですから今回は追いかけません。追いかけようとしても今の戦力じゃゴブリンシャーマンを戦うのは厳しいですから。」

と　僕はエミーに返した。

希望の妖精使い（フェアリーテイマー）（後書き）

やっと1セッション分が終わりました・・・　1セッションでこの話数だともっと一話あたりの文字数増やした方がいいんでしょうか・・・？

いろいろ試行錯誤して行きたいと思うので　よかったらこの小説の感想を書いていって下さい。　お願いします。

帰宅する機械神官（ルーンフォーク）

どさっ　という音と共に、視界からエミーが消える。

「ごめん　ホッとしたら、力抜けちゃった。」

下の方からエミーが頭を掻きながら笑いかける。　それを見てやっと戦いが終わったんだなと思い、拳に無意識のうちに入っていた力も抜けた。

「さて、アドルフ司祭の所に帰りましょう。　人を呼んでここで死んでしまった人も供養しないといけませんしね。　あなたはどうします？」

僕はさっき助けてくれた人に声をかける。　その人は冒険者だと思われる死体に静かに手を合わせていた。　しばらく手を合わせていたかと思うと立ち上がり、僕たちの方を涙を浮かべながら振り返り、立ち上がる。

「ボクも付いて行くよ。　皆死んじゃって行くあても無いしね。」

といい、立ち上がる。　僕たちはそれ以来口を開かずに神殿へと歩いて行った。

行く時の倍の時間をかけ、神殿へとたどり着く。　中ではアドルフ司祭が祭壇で祈っていた。

「アドルフ司祭ただ今戻りました。」

僕がそう言うと司祭は跳ねあがるように立ち上がり、僕たちの方に走って、僕とエミーを抱きしめた。

「よく無事で戻ってきてくれました！　無事に戻ってきてくれてありがとうございます！」

僕たちはしばらくアドルフ司祭に抱きしめられていた。　しばらく抱きしめていると落ち着いたのか僕たちを離し、一歩後ろに下がる。

「それで、どうなりましたか？　そして後の人はどなたですか？」

アドルフ司祭は軽く咳払いをしてから僕たちに問いかける。

「敵はゴブリン三体とゴブリンシャーマン一体でした。　一体倒した後、ゴブリンとゴブリンシャーマンは逃げ出しました。　後ろの人は僕を助けてくれた・・・」

ここまで話して名前を聞いていないことを思い出した。　そのことに気が付いたのか後ろの人は口を開いた。

「ボクの名前はライム　ライム・ラインハルト。　つい最近冒険者になってダーレスブルグに向かう途中で戦闘に巻き込まれた妖精使(フェアリーテイマー)いだよ？」

助けてくれた人改めライムさんは明るく話す。

「ライムさん。　ソウキスとエミーを助けてくださりありがとうございます。　ダーレスブルグに向かうと言っていますが、　疲れたでしょうしこの神殿に泊まって行きますか？」

アドルフ司祭はライムに笑顔で問いかける。

「よろしくお願いします！」

ライムさんは弾けるような笑顔でそう答えた。

帰宅する機械神官（ルーンフォーク）（後書き）

昨日　更新サボってすいませんでした！（焼土下座中）

一日サボると感覚を取り戻すのに七日かかるって本当なんですね。

今回の話、難産だった割に大したことのないできになってしまいました・・・

もっとうまく書けるようになりたい俺でした。

天を駆る妖精使い（フェアリーテイマー）

ライムさんが泊まると決まった後は大変だった。　まずはいつもきれいにしている空き部屋のうち一つにライムさんを案内する。　エミーとアドルフ司祭は死体を弔いに外に出る。僕も神殿の手伝いはしているが種族の都合で神官になることはできない。　ライムさんを部屋まで案内すると僕は神殿の前まで戻り、戦闘が始まる前までやっていた掃除を再開する。　しばらく落ち葉などを集めていると神殿の扉が激しい音と共に破られ、『何か』が弾丸のように飛び出して行った。　僕は慌ててそれを追いかけるが気が付いたら見えなくなっていた。

――――――――――　ライム視点

ボクは部屋に案内してもらってからすこしボーっと天井を見つめていた。　村で皆を率いていたリーダー的存在のジャック　そういえばジャックの提案で旅に出る事になったんだっけ。　考えていると何となく手を動かしたくなったので腰に付いている宝石ケースから妖精魔法を使うために必要な宝石をひとつ取り外し、上に放り投げてはまたつかむ。　そして放り投げると言う動作を繰り返していた。

その間に仲間の事を思い出す。　バカだけどどこか憎めなかったアッシュ。　村で女の子が入浴していると必ず覗きに誘ったトーマス。　そういえば昨日の晩御飯の時に肉をひとつ多く食べた事　まだ謝ってなかったなー。　などと大したことのないことが　浮かんでは消えて行く。　皆でバカやった事。　村に現れたウルフを撃退したり。　『ダーレスブルグで一番の冒険者になろう！』といって飲めもしないエールを出発前に一気飲みしてアッシュが倒れたり。

そんなことを考えていると突然身体の回りにそよ風程度の風が当たる。　『フェアリーウィッシュ』　妖精魔法では最初に教わる魔

法　妖精の力を少しだけ借りる魔法だ。　風はボクに何かを語りかけようとしている。　周りにフヨフヨ漂っているだけの妖精もなにかを言いたそうだ。　そのなかでも特に心配そうな顔をしていた妖精のうち一匹が語りかけてくる。

『ミオクラナクテイイノ？』　と

それをきっかけに他の妖精も語りだす。

『バイバイシナキャ』　とか　『ハヤクハヤク』　と。

気が付いたら僕は宝石をケースに取りつけて立ち上がっていた。

「皆　ありがとう。　力　ちょっと借りるよ。」

僕がこうつぶやくと妖精は皆笑顔になり僕の後ろにはまるで熟練の妖精使いしか使えない移動呪文『ワールウィンド』を使ったかのような風が起きる。　ボクにはまだまだ使えない魔法。

ボクは床を踏み蹴る。　風がボクを後押ししてくれる。　そして僕はボウガンから放たれた矢のように飛び出して行った。　仲間たちが倒れているところへ向かって。

天を駆る妖精使い（フェアリーテイマー）（後書き）

今回はいつもとすこし雰囲気を変えてみましたがどうでしょうか？
　好評だったら時々視点変更を取り入れてみようと思うのですが・・・
・

どんな事でもいいので後書きを呼んでくれた人は感想下さい・・・
　自分じゃ気が付けない部分など多数ありますので・・・

あと今回演出の為にルール無視をしました。　フェアリーウイッュの効果で移動が速くなったりしませんしそもそも一体の妖精を呼びだして判定に＋１　するだけですので・・・

今後も演出の為のルール無視は時々ありますのでそういうものが苦手というかたはこれ以上読むことをオススメ出来ません。

そんなことを頭の片隅にでもいれといて今後も『ココロ』を求める機械兵士（ルーンフォーク）をよろしくお願いします！

追いかける機械神官（ルーンフォーク）

――――――　引き続きライム視点

しばらくは空を漂っていた。　まるで妖精になった気分だ。　風が今ボクがすごい速度で動いている事を教えてくれる。　ボクがさっきくぐった門が見える。　僕は着地の為に足を前に突き出す。　妖精が下から風を吹かせてくれたおかげで減速していく。　そしてボクは地面に突っ込んだ。

――――――　ソウキス視点

あと半分で門と言うところで門の方向から激しい爆音が聞こえた。　先ほどのゴブリンがまた戻ってきたのだろうか。　僕はさらに速く走る。　ただ追いかけるだけだと思いセクタスを置いてきたことを後悔した。　だが取りに行く時間はないのであきらめる。　だんだん門が見えてくる。　門の方から荷馬車がのんびりと歩いてくる。　御者席にはアドルフ司祭が乗っていた。　アドルフ司祭は僕にむかって手を振りながら少し悲しげな表情でこう言った。

「ソウキス　先ほどライムさんが降ってきたのでエミーと一緒に掘りだしておいて下さい。　私はこの人たちを家に帰してきますので。」

アドルフ司祭はそこまで言うと馬に鞭打ち再び家へ向かって行った。　僕は少しだけ安心した。　そしてエミー達のもとへと走っていった。

エミーたちの所に着くと地面はさっきとは別の意味で大変なことに

なっていた。　ほじくり返されたような土の後で真っ赤だった地面が元の土の地面に戻っていた。　その横に大人が十人くらいはいってもまだ空きがありそうなスペースを除けば、の話だが。

その周りにあおむけで息も絶え絶えな状態で倒れているエミーと、きれいな金髪が土で汚れてくすんでしまっているライムが恥ずかしそうに頭を掻きながら座っていた。

その奥では3人の死体が置かれていた。　多分冒険者の死体だろう。

「仲間を弔おうと思ったら魔法が暴走しちゃった」

ライムが照れながらそういったかと思うと立ち上がり、3人の死体の所へ歩いて行く。そして片膝をついて目をつぶった。　しばらく目を閉じていたかと思うと、立ち上がり、3人の死体の指から指輪をとりポケットに入れる。　そして僕たちの方に振り返ってさびしそうな顔でこう言った。

「仲間の墓を作るの手伝ってほしいんだ。　ボクじゃちょっと持ち上げるの大変そうだから。」

僕は無言でうなづいた。

追いかける機械神官（ルーンフォーク）（後書き）

今回も難産でした。　ひとつ思うのですがこの小説を他のサイトに転載しても大丈夫なんでしょうか？　あともうひとつ書いてる途中に大変なことに気が付きました。　次の冒険のことまったく考えていなかったことに。

またしばらく難産になりそうです。

叫ぶ神官（アドルフ）

ゴブリンが襲撃してきてから一週間ほどたった。　あの日以来他の蛮族が襲撃してくることもなかったので今までどおりの生活を続けていた。　ひとつ違うと言うところはライムがこの神殿に住み込みて働くことになった。　と言うことだ。

僕は今日も神殿の前の掃除をしていた。　効率だけを考えれば風を操ることのできるライムの方が適任なのだがこれも修行の一環であることとライムは剣の実力を付けたいらしく神殿の裏で薪を割っていた。　斧ではなく持っていたショートソードで。　そのせいで縦に割れた薪よりも横の方や斜めに切られている薪の方が多かったりする。

そんな事を考えているうちにゴミがひとつにまとまり、集まったごみを集めようと塵取りをとろうとかがむ。　その時、村の方から馬車が走ってきた。　その馬車は教会の前で停止した。　そして御者が馬車の扉を開くと中から白髪の老人が降りてくる。

「アドルフ・マルティン司祭はいるか？　いるならばロンメルが訪ねてきたと伝えてほしいのだが」

と僕に問いかけてきた。　どこかアドルフ司祭と似た雰囲気を感じた。　僕は「よんで来ます」　といい　アドルフ司祭に伝えに行った。　アドルフ司祭に伝えると　「私が呼びに行くからソウキスはお茶の用意をお願いしますと　エミーに伝えて下さい！」　ととても興奮したように言い、扉へと走って行った。

僕は掃除が終わったのでエミーにお茶を持ってくるように伝えると、僕はライムを手伝うことにした。　あいかわらずライムは斜めに切ったり横に切ったりと使いにくい薪を量産していた。　僕はその薪を使いやすい大きさまで砕く。　これがここ最近の日課だった。

「反対です！　そんなこと！　彼にさせるわけにいきません！」

暫らく薪を砕いていると神殿の方からアドルフ司祭の大声が聞こえた。　僕はアドルフ司祭の方に走って行った。

叫ぶ神官（アドルフ）（後書き）

次回からセッション２に入れそうです。　時々アクセス数みてたのですがユニークが１００を超えていて驚きました。　こんな駄作を読んで下さりありがとうございます。　おもしろいと感じたら知り合いに教えて見て下さい。　他の人にこの小説おもしろいよ　と言われることを密かに楽しみにしている俺でした。

危険を感じる神官（エミー）

僕はアドルフ司祭の所、客間に向かって走る。　なぜかライムまで付いてくる。多分おもしろそうだと思ったのだろう。ライムは面白そうなことが大好きだからだ。客間の前にはおろおろしている。エルフの特徴のとがった耳もピクピク動いている。エミーが何かを心配している時のクセだ。　だいたいこのクセが出た時は大変なことが起こる。　だれかが急患で運ばれてきたり、村のどこかでボヤが起きたり、商人がウルフに襲撃されたり、などだ。　今回は一体何が起きるのか。まったく予想が出来ない。　僕はコッソリなかの会話を聞くことにした。

「ですが！」　「だがこのことを過激派が聴き付けたら！」　「彼には無理です！　それに何百年も前に廃れた過去の書物にしか載っていない制度じゃないですか！」　「奴らを納得させるにはそれしかない！」

2人が激しく言い合っているのが聞こえる。　僕はもっとよく聞こうと扉に耳を押し付けようとしたら後ろの方からギシッ　と言う軋む音が聞こえ、それと同時に身体が前の方に倒れて行く。　どうやら扉が開いてしまったらしい。　アドルフ司祭とロンメルと名のった老人は僕たちの事を見ていた。　後ろでエミーも一緒になって倒れている。　どうやらエミーが開けてしまったようだ。　後ろで恥ずかしそうにキョロキョロしていた。　まだ耳は動いている。　アドルフ司祭は茫然としている。ライムは後ろで爆笑している。　そんな雰囲気の中ロンメルさんはこういった。

「今の話を聞いていたのか・・・　なら話は早い。　突然だが君には旅に出てもらう。」

「先ほど過激派がどうのこうのと言っていたのはそのことですか。」
エミーの耳の動きが止まる。　どうやらこれが今回のろくでもない事態らしい。
「そこまで聞いていたのなら説明は楽でいい。　過激派が文句を言いそうな理由それは君がルーンフォークだからだ。　本来神の声が聞こえない者が信仰するなど原理主義者から見れば殺意が芽生えるだろうな。　だから君には数百年ほど前に会った司祭になるための試練、布教の旅に出てもらう。　現代風にいうならば冒険者になってもらうと言ったところだな。　簡単に言うとバジリスクかドレイクを倒すことができれば原理主義者も迂闊に手はだせんだろう。どうだ？　旅に出ては見ないか？」
「ボクは賛成だよ？　もともと僕は冒険者になるために村から出たわけだし」
重苦しい雰囲気の中、ライムは３つの指輪を鎖に通したペンダントを揺らしながら明るい声を上げる。
「僕はその試練　受けます。　これもきっとティダン様のお導きでしょうからね。　今は廃れたと言っても過去に実際に会った伝統ある試練。　原理主義者ならば余計に認めなくてはいけませんからね。
　試練の邪魔をするほど腐ってもいないでしょう。　このままだと迷惑がかかりそうだと言うことも理由の一つですがね。」
「ソウキス！」
アドルフ司祭は強く声を上げた。　反対を押しのけるように言葉を

続ける。

「それに、僕自身実際にドレイクやバジリスクと戦って見たい。と言うのもあります。元が戦闘用だから。　とかそんな理由ではなく本能が求めていると言ったところですね。人族風にいうと『血がたぎる』と言うべきでしょうか」

僕は苦笑いしながら言葉をつづけた。　アドルフ司祭は諦めたように椅子に座った。　それに追い打ちをかけるようにエミーが声を絞り出した。

「司祭様。　ソウキスが心配だと言うならば私も付いていきます。癒し手がいれば安心でしょうし」

もう止める気力もないのかアドルフ司祭は椅子に深く腰をかけていた。

「決意は固いようですね。　もう止めません。死なないで絶対にまた帰ってきて下さい。３人とも私の大切な家族なのですから。」

アドルフ司祭はそこまで言うと言ったん部屋から出る。　そして少したったころ少し大きな皮の袋を持ってくる。

「この中に３０００ガメル入っています。　これで装備を整えるといいでしょう。　あとこれをダーレスブルグの『青い大空亭』という店に持って行って下さい。　そこは私が昔所属していた店で店主と知り合いです。　きっとあなたたちの助けになるでしょう。」

そう言ったアドルフ司祭の顔はいつも通りとても優しいものであった。

危険を感じる神官（エミー）（後書き）

やっと無駄に長いプロローグが終わりました。　ソウキス達の前に立ちふさがる試練。　ソウキスは無事にダーレスブルグに着くのか。

がんばって面白いものを書けるように頑張りたいと思うので応援よろしくお願いします！

旅立つ機械神官（ルーンフォーク）

試練の度に出ることが決まったその日はティダン神殿で宴会が開かれた。　このレセップスの村の人は何かがあるたびの宴会を開く宴会好きな人たちの集まりという事もあるかもしれない。　アドルフ司祭とともにティダン様に旅の成功と安全を祈り終え、太陽が沈みきった瞬間に、村の中央の広場に再び太陽が昇ったかと勘違いするほどの盛大なかがり火がたかれる。　村の人たちが腕によりをかけた料理を囲んで村人総出でやる宴会はいつ見ても驚かされる。　中のよかった村の人たちに「旅　がんばってこいよ！」　などと言われて肩を強く叩かれたりする。　僕はそれに応えるかのように肩を組む。　ライムは大人に交じって飲み比べをしている。　エミーはそのそばで倒れた人の看病をしていたり、アドルフ司祭もなぜか飲み比べに巻き込まれノックアウトされたり、と　途中で抜けるにはおしい盛り上がりであった。　ちなみに後で聞いた話だとライムは最後まで宴に参加していて村で一番酒に強い男まで倒していたらしい。　そのうちいくら飲んでも酔わない神聖魔法があると言われている『酒幸神サカロス』の信者とも飲み比べで勝ちそうだ。　と誰かが呟いていたらしい。

宴の翌日、日の出と共に僕たちはほぼ全員に見送られて村を旅立つことになった。　ちなみにエミーは遅くまで看病していたせいで少し足もとが危なっかしいのに対して、ライムは何事もなかったように陽気に鼻歌を歌いながら歩いていた。　ライムに二日酔いしないのかと聞いたら　「酒飲んだらなおっちゃった。」　と言っていたのは聞いていた人全員がずっこけた。　エミーは旅に出る前にもらったティダン様の印が描かれた皮でできた防具『ソフトレザー』を着ていた。　ライムも汚れを新品同然まで落とした服見たいな防具『クロースアーマー』を付けていた。　僕は特に防具を付けず、い

つでも戦えるように両手に『セクタス』　足に『スパイクシューズ』を履き、周囲を警戒しながら歩く。

エミーが付いてきているか確認するために振り返った時、　僕は気が付いてしまった。　さっそくエミーの耳がピクピクと動いている事に。

「見て！　あっちで何か燃えているみたいだよ！」

それと同時にライムは声を上げた。　確かにライムが指をさした方向で何かが燃えているらしく、空高く煙が上っていた。　パンを焼いているような白い煙ではなく　何かが激しく燃えているような黒い煙が。

「エミー　今走れそうですか？」

という僕の問いかけに応えるようにエミーは真剣な顔で首を縦に振る。

それを確認して僕たちはライムが指をさした方向に走り出した。

旅立つ機械神官（ルーンフォーク）（後書き）

やっとセッション2に突入する事が出来ました！　土曜日にソードワールドのノベルを買うことが出来てそれを参考にしながら書ければいいなと思っています。　現在ルールブック1～3のみでやっています。　早くアルケミストワークスがほしいなと思いながら執筆する俺でした。

駆け抜ける機械神官（ルーンフォーク）

煙の発生源はおもっていたより近かったらしくすこし走ると戦っている音が聞こえる。　どうやら荷馬車が襲われているようだ。　荷馬車を襲っているのは蛮族ではなくボロボロの皮製の鎧を山賊のようだった。　剣をもった突撃兵が3人　杖を持った神官のような男が一人　杖にはティダン様の聖印が刻まれている。　そして後に大将らしき男が大声で怒鳴り散らしている。　よく見ると馬車を守っているのは鉄の鎧を身にまとい頭に頭巾をかぶっている1人の男であった。　山賊まであと30メートルのところまで迫る。　僕が神官らしき男を殴ろうと腕に力を込めると僕の後ろから白い弾のようなものが飛んできて今まさに回復魔法を打とうと神官が吹き飛ばされる。　回復を期待していた男が一瞬振り返る。　その隙を見て馬車を守っていた剣士が振り返った山賊を斬り伏せた。　そして男が叫ぶ。

「今のうちに離脱しろ！　守りながらの戦いには限界がある！」

その声に御者はうなずくと振り返りもせずに荷馬車は走りだした。　山賊たちが態勢を立て直すためにいったん下がる。　先ほど吹き飛ばされた神官もすでに立ち上がっていて、斬り伏せられ、気絶していた山賊を回復する。　先ほど馬車を守っていた男がこっちに向かって走ってくる。

「協力を感謝する。　俺はザイア神殿所属の　アイゼン・イェーガーだ　乱入したからには最後まで付き合ってもらうからな。」

アイゼンと名乗った男は『騎士神　ザイア』　を信仰する神官戦士のようだった。　ザイアの特殊神聖魔法は仲間を『守る』ときに真

価を発揮するものが多いのが特徴だ。

「いえ　ティダン様を信仰する身としては当然です。　僕は　ソウキス・マルティン　後ろのエルフの少女は同じくティダン様を信仰している　エミー・ミストラル　そして人間の少女はライム・ラインハルトです。　早く始末して馬車に合流しましょう。」

「ソウキス（戦友）か　いい名前だ。　太陽信者（ティダン信者）の実力見せてもらうぜ！」

僕は出来るだけ早く名乗り、アイゼンさんがそれに応える。　山賊の大将が前に出てくる。

「作戦会議は終了か　坊主ども　俺たちには向かった事を後悔させてやるよ。」

と　言うと同時に巨体に似合わない速度で斧を振りかぶりながら僕に向かって弾丸のように飛んでくる。

僕はかわそうとしたが間に合わない。　そう思った瞬間、金属製のもので目の前が塞がれた。

駆け抜ける機械神官（ルーンフォーク）（後書き）

今回の話　本当はレッドキャップの群れの予定でしたが書いている途中でなんかモヤモヤしてきたので思い切って変えてみました。なにか作業用にオススメなＢＧＭってありませんかねぇ　と若干のスランプに悩む俺でした。

拳を振るう冒険者（ルーンフォーク）

いつまでたっても来るべきはずの衝撃が来ない。　無意識につむっていたらしい眼をおそるおそる開けようとする前に声が聞こえた。

「お前、とろいなぁ。　守るのは俺の専売特許だからいいけどな。　防御なんざ気にせず思い切り攻めろ。　お前に来る攻撃は」

アイゼンさんはそこまで言うと盾を振り回して山賊の大将を吹き飛ばす。

「ザイアの名のもとに全てこの俺　アイゼン・イェーガーが全部防ぎきってやる。　ソウキスは拳闘士（グラップラー）らしく殴る事に集中しろ！　後ろの2人は敵の神官押さえろ！　一気に突き崩すぞ！」

僕はその言葉に頷く。　後ろから先ほど見た白い弾が飛んできて神官を吹き飛ばすのが見えた。　近くで倒れていた山賊の大将の顔を踏みつぶす。　堅いものがつぶれる感覚。

救出の為か山族3人が突っ込んでくる。そのうち1人が火に包まれその場でのたうちまわる。　アイゼンさんが僕の前に壁として立ちふさがり山族の1人に振りかぶった大剣をたたきつける。　山族のうち1人が大将を引きずって離脱する。　立ち上がっていた神官は必至の形相で回復する。　鼻の形が変わってしまった大将は立ち上がりこちらを睨む。　そしてポケットから瓶をとりだし中身を一気に飲み干した。　仕切り直しと言わんばかりにこちらをにらみ叫ぶ。

「やっちまえ野郎共！　ぶっ殺すぞ！」

そう叫ぶと再び斧を振りかぶり、山族と僕達がいるところに突っ込んでくる。　正直蛮族より怖い。　僕と大将の間にアドルフが割り込み防ぐ。　アイゼンさんの横をすり抜け、先ほどたたきつけられた山族が僕に迫るがセクタスを使い剣を受け止める。　もう一人走ってくる山族が居たがそいつに向かって投げつける。　２人まとめて転倒する。　もう一人の山族が大将とつばぜり合いをしているところに切りかかろうと飛び込んできた。

「お願い！妖精達！」

ライムの叫びと同時に山族は火に包まれ大将の方に転がって行く。　大将は慌てて後ろに飛んで回避しようとするがそこを許すほどアイゼンさんは甘くなかった。　盾を投げ捨て『バスタードソード』を両手で振りかぶった。

「くたばれやあああああああああ！」

気合いと共に振り抜く。　山族の大将は胸から腹に一本の線が出来るが血はあまり吹き出さない。　どうやら浅かったようだ。　大将は傷みに顔を歪めた。

僕は一番近くに転がっている未だに身体から煙が上っている山族に向かって左手で殴り、右手でさらに追撃する。　山族は白目をむき気絶した。

「これで４対４だな　この調子でいくぞ！」

アイゼンさんは剣を高く掲げ、そう叫んだ。

拳を振るう冒険者（ルーンフォーク）（後書き）

戦闘シーンに入ってからルール無視が目立ちますがそこはＧＭ（作者）権限ってことで勘弁して下さい。　自分より大きい生物転倒させることが出来るんだから山族をすこし遠くに投げれてもいいじゃないですか・・・

山族相手にこんなにかかってるとバジリスクやドレイクはどうなるんだと頭を抱える俺でした。

やはり一話あたりの文字数増やした方がいいんでしょうか？

覚悟を決めた神官（エミー）

山族の大将は足もとに転がっている山族を一瞬見ると再び斧を構え、叫ぶ。

「早く俺を回復しろ！　早くしやがれ！」

しかしいつまでたっても回復する気配はない。　ライムは爆笑しながらこう告げた。

「あんたのお仲間、　もうとっくに逃げてるよ。　大将のあんたより怖いものがあったのかねぇ。」

言い終わった直後ライムは笑い転げる。　大将の顔が一瞬青ざめたあと、熟れ過ぎたトマトのような色に変わる。

「あんの糞野郎共！　後で覚えてやがれ！」

大声で叫んだあと、傷から血が噴き出しているのにも関わらず未だに笑い転げているライムに向かって斧を振りかぶり、突撃をした。

「あなたに『後』は来ません！　ティダン信者を悪事につかった裁きを受けてもらいますよ！」

エミーがライムの前に立ちふさがる。　聖印が光り輝く。

「神の裁きを愚かな咎人に与えたまえ！　『フォース！』」

呪文を唱え終わると光は先ほどから後ろから飛んでくる光の玉に変

わり、大将を吹き飛ばす。　大将は地面をボールのようにアイゼンさんの方に転がっていく。

「ライム！　上出来だ！」

アイゼンさんはそう言うと大将に『バスターソード』を叩き付けた。
　辺りに鈍い音が響き、大将は白目をむき倒れた。

「終わった・・・よな・・・？」

アイゼンさんは大将を足でつつく。　大将はピクピク動いているが、起き上がってこない。　気絶しているようだ。
「さっさとこいつら縛って荷馬車に合流するぞ。　まだ遠くには行ってないはずだからな。」

よっこらしょっとおっさんくさい言葉を言いながら大将を抱え上げながら言う。

「アイゼンさん。　僕達も――――」

「いいぞ。　さっきまで組んでいたやつらは臆病者ですぐ逃げ出しちまったし、他の山族が逃げ出したわけ、　ライムの『ウィンドボイス』でも使って脅したんだろ？　お前らと組めば面白い冒険になりそうだからな」

着いていっていいですか。　　ときこうとしたのと同時にまるで先読みをしていたかのように応える。　ライムは図星をつかれたかのようにびくっとしたあと話し出す。

「いやー　正直対象以外には聞こえない呪文だったけどさ、あんま

り使ったことないから対象選択失敗しそうで怖かったんだよ～　相手がバカで助かったよ。　ソウキス～　この山族重いから運んでよ～」

僕は　ハイハイと　言いながらライムの方へ走って行った。　エミーは話している間に他の人を回復させていた。

そして僕たちは再びダーレスブルグへ向かって歩き出すのであった。

覚悟を決めた神官（エミー）（後書き）

書いてる途中で思ったのですが　主人公ってなんだっけ？　と聞きたくなるような出来　最後の（多分）ボス戦で出番が全くないとは・・・　自分でいうのもあれだけどひどいな。　ちなみにこれはセッション２ではなくただのランダムエンカウントみたいなものです。

頼れる仲間（盾の役割が強い？）が増えましたねぇ　こっからダーレスブルグまでつっぱしりたいと思いますので応援お願いします。

荒れた村（クエスト）

しばらく歩いたら荷馬車に合流することが出来た。　荷台の方に山族を放り込む。　さりげなくライムも荷台に飛び込んでいた。　エミーも歩き疲れたのか飛び乗ろうとしたらアイゼンに首根っこをつかまれて、しばらくは猫みたいな体制でアイゼンにつかまれ、離されようともがいてるところを御者に見られて爆笑されたり、と平和な旅をしていた。　しばらく歩いていると村が見えてくる。　どうやらこの村で泊まるらしい。　荷馬車は村の柵と柵の間を通り、村の中に入る。その時、僕はこの村に『違和感』みたいなものを感じる。　だがその正体がわからない。　村長みたいな人と御者の人が話しながら家に入っていった。

「ソウキス。　なにか変じゃない？　この村。　何か冷たいと言うか。」

後ろからエミーが声をかけてきた。　耳は動いていない。

「確かにそうですね。　なにかあったんでしょうか？」

「あったのか？じゃないな　なにか『あった』んだろう。　多分つい最近に」

アイゼンさんがヌッと現れる。　『バスタードソード』をいつでも戦えるように持っている。

それと同時に家から暗い顔をした村長と御者が家から出てきてこっちに歩いてきた。

「な？　あたっただろ？」

アイゼンさんは冗談を言うような口調でそういった。　しかし顔は真剣そのものだった。

「村長さんよぉ　俺達に依頼があるんだろ？　詳しい事教えろよ。」

アイゼンさんはザイアの聖印をチラつかせながらいう。　その言葉を聞いたからか聖印に安心したのか語りだした。　この村で起きたことを。

「ここ半年の間、ほぼ毎日畑が荒らされておる。　身張りが何人いたとしても誰も気が付かずだ。　ひどい時には身張りをしていた若い衆が怪我を負う始末。　このままだとこの村は・・・。」

「おっと村長さん　これ以上言う必要はないぜ？　簡単な話だ。犯人見つけて畑が荒らされなくなればいいんだろう？　その依頼受けるぜ。　な、お前らもいいだろ？」

「僕は問題ないです。」　「私も受けます。」　「おもしろそうだからいいよ～」

いつの間にかいたライムはともかく、全員受けることになる。

「村長さ～ん。　受ける分には構わないけど報酬ってどうなってるの？」

ライムは容赦なく聞く。

「1人当たり500ガメルを約束しよう。　そしてこの村に居る間の食事と宿を提供する。これでどうだ？」

村長は少々苦しそうな顔で言う。　30ガメルあれば一週間は暮らせる。　そう考えるとかなりの額だ。

「相場と比べたら少し安い気がするけど・・・　ご飯くれるしいっか。　交渉成立だね。」

ライムはそう言うと村長の手を握った。

荒れた村（クエスト）（後書き）

昨日は英検の準備で更新できませんでした。　すいませんでした。

やっとセッション２　今回も防衛線だ。　防衛線しか書いていないような気がする俺でした。

手掛かりを集める機械神官（ルーンフォーク）

「さっそく現場いこっか。　現場千回って言葉もあるしね。　おいで一皆（フェアリー達）そろそろ出番だよ。」

ライムは先に家から飛び出していく。　現場がどこにあるのかも全く聞かずに。

「私、連れ戻してくる！」

エミーも引きとめるために部屋から飛び出す。　多分ライムの事だからすでに豆粒くらいしか見えないと思うが。　その予想通りアイゼンさんが現場の位置を聞き終わる頃には涙目になって部屋に戻ってきていた。

アイゼンさんを先頭に現場に向かうことになった。　現場は僕達が入ってきた村の正面。なにか変だと思った理由は畑にあるはずの作物がなかったということなのだろうか。

「とりあえず、手分けして手掛かり探すぞ。」

アイゼンさんからの指示。　アイゼンさんはその後大きく息を吸い叫ぶ。

「ライムゥ〜〜〜〜！　俺達はここだあぁぁぁぁぁ！」

だぁぁぁぁ　と言う声が村中にこだました。

「これで大丈夫だろ。　俺は斥候の心得も野伏の心得もないから役

に立てないがお前らはどうだ？」

アイゼンさんは少し残念そうな顔でそう言った。

「僕は少しだけなら斥候の心得があります。」

「私は野伏なら。　エルフの里に居た頃何度か狩りの手伝いをしたことがあるので。」

「ボクも斥候なら出来るよ～　偵察ならお任せあれっ。」

いつの間にかここに来ていたライムは放置して、エミーに野伏の技術があるのは意外だった。　いつも神殿の手伝いをしていて、村の人と薬草をとりに行ったことなど僕が知る限り一度もないと言うのに。　エミーは役に立てるのがうれしいのか顔を赤くしていた。

「さて、何か手掛かりでも探しましょう。　犯人の手掛かりがあるだけで大分楽ですからね。」

僕はそう言って、現場の方へ足を進める。　現場には何かが引き抜かれたあとの周りに人間の足跡が大量にあった。　まずそれは除外する。　多分、というか絶対に村の人のであろう。　その周囲、村の外側の方向から伸びている人間のものではない足跡を発見する。

「エミー。　ちょっとこっち来て下さい。」

僕はこの中で一番魔物に詳しいエミーを呼ぶ。　エミーは危なっかしい足取りで僕の方に来る。

「この足跡を見て下さい。　これって例の『襲撃者』のものではないでしょうか？」

僕はエミーに問いかける。　エミーはしばらく難しい顔でうんうん唸っていた。

「ゴブリンでもないし、レッドキャップにしては大きすぎる。　ボガードのものでもないし、ウルフ・・・？　違う。」

「ごめん。　ソウキス。図鑑がないと厳しいよ。　私にはこれが人間の足跡ではないとしか・・・・」

エミーは残念そうに僕にそう告げる。　そのあとライムやアイゼンさんに聞いても結果は同じであった。　しびれを切らしたのかアイゼンさんは急に叫び出した。

「ふざけるなよ見えない犯人め！　今夜迎え撃つぞ。　訳のわからん犯人探すよりも手っ取り早くて簡単だ。」

手掛かりを集める機械神官（ルーンフォーク）（後書き）

今回も特に進展はなしです。　ひとつ言いたいのですがここで出た『野伏』は山族みたいなものではなく、野外で活動するためのもので、あしあとをたどったり天候や薬物に詳しかったり出来る技能です。　ルールブックにレンジャー（野伏）とかいてあったのでそれを採用しました。　紛らわしくてすみません。　できれば感想書いてほしいと思う俺でした。　よんでくれてありがとうございます。

見えない敵（アサシン）

「そろそろ奴らが来る時間です。」

『ライトメイス』という軽量の金属製の棍棒をふるえる手でもっている村長が呟く。

「村長さんはもう戻ってていいよってさっきから言ってるのに・・・」

ライムは半分あきれたような口調でぼやくが村長はふるえながら正面を睨んでいた。　後ろには村長がなにかあった時に逃がすためなのか武装した村人が待機していた。

アイゼンさんは門のすぐ前で仁王立ちしていた。　月が雲に隠れ、かがり火の光だけになった。　突然僕は寒気のようなものを感じた。
　僕はすぐに攻撃できるようにアイゼンさんの隣で拳を構えた。
同時に身体から血が噴き出す。

「何！？　全員戦闘準備！　村の人は村長を守れ！　エミーは早くソウキスを回復しろ！」

かがり火を大量に焚いていて、昼みたいに明るい場所のはずだった。
　しかし敵の姿はどこにも見えない。

再び僕の腹から血が噴き出した。　量が多かったのか前に飛び散る。
　その血を見て僕は唖然とした。　血が空中で『止まっている』からだ。

「見えた！　そこだ！」

アイゼンさんは血が止まっているところを切り裂く。　斬られたところからまるで紙に水をたらしたかのようにジワジワと筋肉と血管の浮き出た奇妙な人型の『何か』が現れる。

僕は姿を消されないうちに追撃をする。　激しい鳴き声を上げ、呻きのたうちまわる。

「エミー！　早く回復を！」

アイゼンさんは吠える。　突然の戦闘でパニックになっていたエミーは自分の役割を思い出したかのように聖印を握って呪文を唱え出す。

僕の身体が癒されるより先に目の前の『何か』が口らしきところからよだれをまきちらし、僕に接近してくる。　ライムが『ファイアボルト』を唱えるが、当たらない。　腕らしきものを高く振り上げた『何か』が目の前に来ていた。　よけようと横に飛ぶが間に合わない。　その隙間にアイゼンさんが割り込み、攻撃を受け止める。

追撃を仕掛けようとした時、後ろから村人の悲鳴が響いた。

「後ろ！？」

後ろで村の人々の血が飛ぶ。　その血が『もう一体』　の敵の姿を映し出していた。

「ライム！　後ろの奴は任せた！　エミーはソウキスの回復の後ライムのフォロー！　ソウキス！目の前のヤツを一気に殺るぞ！」

『了解！』

アイゼンさんは後ろを振り向かずに指示を飛ばす。　僕達は指示通りに動き出す。　僕の身体が輝き、傷が塞がる。　多少カサブタになっているが戦闘には支障はなさそうだ。

「吹き飛んで下さい！」

声で気合いを入れ、相手を殴り飛ばし、アイゼンさんはのけぞった相手に剣を突き刺す。相手は苦しそうに雄たけびを上げた。

見えない敵（アサシン）（後書き）

書き終わった直後に書くのも変ですが、もっと文才が欲しい・・・

何か納得できないでモヤモヤしている俺でした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0530x/

『ココロ』を求める機械兵士（ルーンフォーク）

2011年10月18日21時54分発行